

淀川水系流域委員会 第2回木津川上流部会 結果概要

開催日時：2005年8月20日（土）13：00～14：05

場 所：名張シティホテル 3階 天平・白鳳の間

参加者数：委員 15名、河川管理者（指定席）12名 一般傍聴者 123名

※本稿は、議事の概要を簡略にまとめたものです。詳細な議事内容については、後日公開される議事録をご参照下さい。

1. 決定事項

2. 審議の概要

- ① 岩倉峡の流下能力検証の進め方について
- ② 河川環境の保全・整備と川上ダム建設について

3. 一般傍聴者からの意見聴取

1. 決定事項

- ・ 次回の木津川上流部会は、9月12日（月）14：00～17：00 大阪商工会議所にて開催する

2. 審議の概要

①岩倉峡の流下能力検証の進め方について

- ・ 上野遊水地の浸水状況の検証するためには、岩倉峡入口の水位と流量の関係があらゆる水理計算の出発点になる。しかし、観測値が非常に少ない。必要な数値は4000m³/s程度の水位と流量だが、実際には2000m³/s程度までの観測値しかないために外挿しなければならない。4000m³/sまで外挿するのは非常に難しく、誤差も大きくなっていく。しかし、この検証が上野盆地の治水を検証するための出発点になる。これまでも河川管理者から報告がなされているが、不十分だ。より進んだ技術で詳細な検討をお願いしている。
- ・ これまでに河川管理者から出されている数値が高過ぎるのか、低過ぎるのか。近傍値なら問題ないだろうが、疑問を持つほどの違いがあるのか。
 - ←河川管理者から説明してもらった数値は大きすぎるとも小さすぎるとも思っていないが、必ずしも納得しているわけではない。非常に重要な数値なので、十分に納得できる説明をしてほしいと思っている。一般傍聴者からも岩倉峡の流下能力について再三意見が出されている。もし20～30cm違っていると大変なことになるので、再度検証してほしいと思っている。
- ・ 岩倉峡の流下能力がはっきりすれば岩倉峡の小開削が可能になるのかどうか。可能であれば、川上ダムをつくらなくても、上野遊水地と河道改修と堤防補強で上野の治水目標が達成できるのか（部会長）。

←水位の想定値が大幅に狂っていけば（例えば 50cm 程度高く見積もっていれば）、川上ダムの必要性に大いに関係してくるが、岩倉峡の流下能力は川上ダムとは関係なく検討してほしい。河川管理者は最善の手法で計算してきたことは確かだが、不等流計算の計算過程には納得できない部分もあった。非常に重要な数値なので、これまでにはない新しい方法でも検討してほしい（委員）。

- ・実測値が 2000m³/s までしかない状態で、4000m³/s の状態をどう推測するか。外挿するのは非常に危ない方法だと思う。2000 を 4000 まで引き伸ばすとエラーも大きくなるので、水理的な検討に重点を置いた方がよい。また、模型実験も 1 つの方法だろう。これまでに模型実験をしたことはあるのか。

←越流堤の諸元を決定するための実験はしたが、河道と遊水地に関する実験はしていない。また、岩倉峡のHQや疎通能力に関する実験もしていない（河川管理者）。

- ・岩倉峡を開削しない理由は、下流で堤防天端マイナス余裕高を超えないようにするためだが、その時に、島ヶ原ではいくら以下の流量でなければならないのか。また、島ヶ原の制限流量をどれくらいで想定しているのか、教えて頂きたい。

←後日、回答したい（河川管理者）。

- ・岩倉峡の流下能力に関するやりとりを最終的な意見形成にどう反映していくか。河川管理者がきちっとした数値を出せない背景には、技術的に計算するのが難しく、実験をしても実際に起きてみないと分からないという側面と、洪水の問題は「安全サイドで大きめに」という気持ちが解析の中に含まれてしまうという側面がある。この問題をどう扱っていくか。河川管理者には思い切った判断（ギリギリどこまでできるか）が求められると同時に、安全度を大きくとりすぎない代わりにソフト対策等で担保していく必要性が出てくる。河川管理者の相当強い思いがなければ、この問題をよい方向に持っていくことはできないだろう。

- ・アメリカのポトマック川では渇水対策としてダムをつくる計画だったが、渇水情報を蓄積して試行を続けていく中で、新しい可能性を見出した。琵琶湖でも水位操作の試行を 2 年間続けた。同じように上野地区でも、洪水情報を毎年蓄積して、関係市町村、民間団体、利害団体等で試行をしながら合意していくことができるのか、できないのか。できないのであれば、岩倉峡流下能力の計算結果をすぐに出すように河川管理者に言うのか、言わないのか。河川管理者から計算結果が出ないまま、結論を導き出すのかどうか。岩倉峡の流下能力検討とプロセスづくりがオーバーラップしてきていると感じている。

- ・本来であれば、「技術的な話は河川管理者に任せる」となっていかなければならないが、そうはなっていない。河川管理者に全てのデータを見せてもらえないのではないのか。技術的な信頼回復を図るようにやっていくしかない。

- ・岩倉峡流下能力検証の今後のめどを教えてください（部会長）。

←検証作業を進めているが、その手法について疑問があるので、専門家の指導も受けながら、速やかに検討を進めていきたい（河川管理者）。

②河川環境の保全・整備と川上ダム建設について

- ・ 審議資料 1-10「第 43 回淀川水系流域委員会における委員からの質問に対する資料」で示された数値に基づいて、審議資料 1-4-2「川上ダム建設に伴う自然環境への影響について」で示されている水質予測のモデル（鉛直 1 次元貯水池解析モデル）による解析が、川上ダムの将来の水質を正しく予測できる精度を持っているかどうかを回帰分析した。その結果、水温と溶存酸素についてはある程度再現できているが、その他の項目はほとんど再現できていないのではないかという結論に至った。特に T-P、T-N、クロロフィル a のデータはばらつきが多い。
- ・ 河川管理者は鉛直 2 次元モデルでもシミュレーションをすると説明していたが、その後はどうなっているのか（部会長）。
 - ←1998 年 1 月～2001 年 12 月までの全データをもちいて鉛直 1 次元モデルで実施したが、この期間には試験湛水期間も含まれていたため、通常期のデータだけでプロットしてみた。その結果、実測値と予測値の関係がよく出ている。次の機会に具体的な数値を示したい。他のダムでも鉛直 1 次元モデルで検証しており、この程度だと考えている。今後、対策を実施する際には、鉛直 2 次元モデルで検証する必要があると思っている（河川管理者）。
 - ←河川管理者は「おおむね再現できている」としているが、委員の回帰分析ではない。村上哲生委員に問い合わせた上で、より正確な結果を報告してほしい（部会長）。
 - ←何かよい提案はないのか。他の技術がないのであれば、可能な技術でやっていくほかない。予測が合った・合わないの議論に終始していてもしょうがないだろう。
- ・ 富栄養化関連項目をモデルから予想するということが自体が間違っている。富栄養化の予測にはかなり大きな幅があるので、上限と下限を指摘することが大切だ。予測の幅がどの程度なのかが知りたい。また、いったい何のために SS や BOD を計測しているのか、その目的が分からない。何を測ろうとしているのか、何を改善しようとしているのかを指摘されない限り、資料の数値からは何も読み取れない。何のために計測しているのか、数値だけではなく、計測する目的も提示してほしい。
- ・ 資料 1-4-2「川上ダム建設に伴う自然環境への影響について」のオオサンショウウオのデータだけでは、川上ダムによって生息環境がどの程度失われるのかを評価するためには不十分だ。先日の委員会で河川管理者から（合流している前深瀬川と川上川のオオサンショウウオの）「DNA が同じだ」という説明があったが、DNA は個性なので同じであることはあり得ない。どの部位を調査し、どういう調べ方をしたのかをはっきりさせる必要がある。また、3000 万年前から西日本に限定して分布しているオオサンショウウオの遺伝的多様性は、局所的に分布することによって多様性が維持されていて（この二つの川の）個体群がダムによって遺伝的な交流がなくなると、種全体の遺伝子プールの中

にどのような影響をあたえるのかという評価がなされていない。この地域の個体群が絶滅しても遺伝的多様性に問題がないというのであれば、その根拠をきちんと示さないといけない。他にも、移動能力もよくわかっていないし、移動させた後の保護施策の効果について検証されたデータもない。繁殖させた個体と天然の個体を比較や人口巣穴についての生物側から評価をしていく必要もある。物理的な移動による定着率はどの程度なのかといった科学的な評価がないにもかかわらず「影響は小さい」と結論しているのは納得できない。きちんと評価するための科学的な説得力のあるデータを出して頂きたい。

- ・上野地区の住民には、自分たちが犠牲になって大阪や京都を守っているという意識がある。審議資料 1-77 に代替案として上野地区の各種治水対策とその概算額が記載されている。設遊水地の掘削（案）にはそれなりの補償も含まれている。遊水地を掘削するのはかなり大変だとは思いますが、そういったことも含めて現実的な議論をすることが大事だ。

3. 一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 2 名から発言があった。主な意見は以下の通り。

- ・河川管理者は 22 年間、岩倉観測所で観測を続けてきた。その結果、平成 5 年に計画高水位 10.5m で 3,360m³/s という計算を河川管理者自身が行っている。これをつなげていくと、現在プロットされている実測値ときれいに合っている。岩倉峡の疎通量については、一般から寄せられたご意見 No. 598「岩倉峡の疎通量のことについていつ迄嘘をつき続けるのか」でも指摘しているが、なぜ委員会はこの点をあいまいにして、河川管理者の氾濫シミュレーションに踊らされてきたのか。また、川上ダム地点で 1,100m³/s の基本高水になるピーク流量は、319mm に引き伸ばしたところで 10 洪水にも出でおらず、せいぜい 900m³/s どまりだ。なぜこの 1,100m³/s のピーク流量を基本高水として議論してきたのか。一般から寄せられたご意見 No. 598 が本日の部会で配布されていないことに不信感を覚え、庶務に憤慨している。ダム建設に不都合なものはできるだけ抑えようとしているところが見られるので、委員会の注意を喚起したい。
- ・資料 1-4-1「川上ダム建設に伴う自然環境への影響について」に学識経験者のコメントが付されている。この委員は、以前、猪名川で見つかった背中の曲がった魚について、「小魚の時に背骨が曲がった魚が生きていけるのは、自然環境のよい猪名川のアシの中に隠れて鳥などに食べられずに大きくなれるから」というコメントを出した。しかし、他の環境保護の専門家によれば、それは間違っているとのことだった。この委員が「影響は少ない」とコメントしても、信用できない。

以上